

アメリカ農業のプライド

カリフォルニアであらためて気付いたことがある。行政は限りなく後ろに引いていること、農協は経営者のものであるということ。そして、個々の経営者の逞しさである。それが先進国の農業なのだ。アメリカ農業の強さとは、単に経営条件の良さによるだけではなく、競争の中で勝ち残った者の強さとチャレンジ精神によるものなのではないかと感じた

今回の旅行を通して、単に百聞は一見に如かずという意味だけでなく、合わせ鏡を見るように自分たち日本人や日本農業の姿が見えてくるような気がした。わが国の農業がいつまでも産業としては宙ぶらりんな存在としてあり続けてきた理由も思い当った。

そのひとつは、農業界で語られる時の「農家自身の意識を含めた——『農業経営者』という存在、農業の『経営』の『主体』が誰であるのか」ということの曖昧さである。

これまでも意欲のある営農家たちは、「中核農家」あるいは「担い手」などという言葉でもはやされてきた。しかしそれは農業生産労働に携わる「農業従事者」という労働力としての評価であり、「事業主」あるいは「経営者」としての位置付けではない。

語られるのは「農民」、「農家」という生活者としての階層分類であり、経営の『主体』としての「農業経営者」が語られることは少なかった。その理由は、農家が営業、販売の部門を持つケースが少ないという『経営体』としての不完全さということだけではない。むしろ、農業の行政による主導性が強すぎることに加え、『権利要求団体』という性格の強い農協が経営の前面に立ち続けてきたことで、農業経営者の活躍の場が規制されてきたのである。

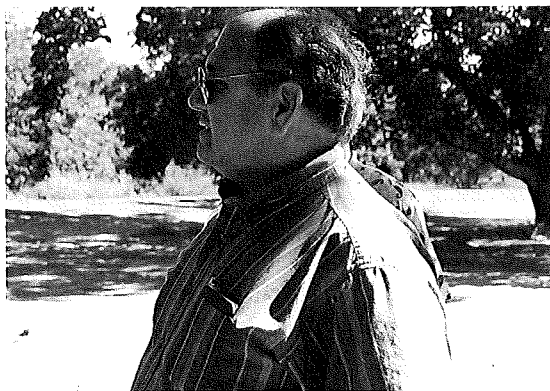
農業の官僚支配と、「経営者の組合」ではあり得なかった農協とが、営農家が経営者としての『主体』を確立すること、を妨げ、その『誇り』を傷つけ続けてきたとすら言えるのではないだろうか。お

ためごかしの言葉で被害者意識を煽られ続けながら、行政や農協の『作男』のような存在に置かれ続けてきたといった言い過ぎであろうか。

あえていえば、かつての地主階層が持ち得ていたであろう『経営主体』としての自負こそが擁護される必要があるのではないか。『結果の平等』を求める被害者意識や『権利』意識ではなく、『チャレンスの平等』を求めるチャレンジ精神、事業者の自負、経営への永続性を求める経営者の意思の存在こそが、まず最初に問われねばならないのである。経営者個人の力が試され、健全な競争が存在すれば農業は再生する。それらの総和としてこそ日本農業の強さが作られて行くのではないか。農業は地域の協力が無ければできないという議論も当然であるが、それとても経営者たちが作り上げて行くものなのである。そして彼らこそが、農業の歴史や誇りを受け継ぐ中心人物なのではないだろうか。

家の歴史を語るアメリカ人

サクラメントの近郊、サクラメント川にそったコルサという村でクルミ栽培を中心とした農園を経営するフォリーさんを訪ねた。同氏は550エーカーの農園で250エーカーのクルミ栽培を中心に各種の作物を作っている。果樹以外にも150エーカーの畑に加工用トマト、ピーンズ、稲などを栽培しているが、こうした作物は、出来高に応じてフォリーさんに収益が戻ってくる形で専門に作る農家に依託しているのだという。その他、クルミの調製施設を持っており、自分の



祖父の代からのくるみ園を受け継ぐフォリーさん

もの以外のクルミ調製も受託している。

今年55歳というフォリーさんのクルミ園は、97年前、同氏の祖父の時代に始まったもので、いまでもその当時の作業小屋が、いわばフォリー家の記念碑のように残されていた。その小屋は入植の頃に植えたのである古いピーカンナッツ(鬼クルミ)の木陰にあった。

フォリーさんの先祖はイングランドの出身で、ドイツに渡り、そこからアメリカのミズーリ州に移住して、1848年にカリフォルニアに移り住み、97年前にこの場所で農業を始めたという。

案内されたクルミ園のクルミは、祖父が同地に来る以前からの古木から昨年新植された新しい木までが混在している。クルミの木は古くなくても生産力が衰えないらしい。しかし、古木を残しながらも、機械収穫の都合に合わせた栽植になっている。

フォリーさんの果樹園の脇で大きく蛇

行して流れるサクラメント川は、十数年に一度氾濫し、果樹園の堤防を決壊させる。そのためにフォリーさんは自力で川をさらい、堤防も築いた。日本でこんなことが許されるのかどうかは知らないが、フォリー家がそこに移り住む以前からのクルミをいまでも守りつつ、そこまでのことをして自らの農園を築いてきた。

フォリーさんは、自分の先祖がここに辿りつくまでの歴史を話してくれた。しかし、それは家柄自慢ではない。先祖の困難の歴史であり、誇りの歴史を話したかったのではないかと思う。そして彼もまた、ただフォリー家の家督を受け継いだのではなく、彼自身のフォリー果樹農園を創った。

そして昨年、同氏の子供が何かを決意したかのように大学を休学し、自分自身の手でクルミの新植を始めた。農業経営者になることを決めたようだ。彼は大学4年生。それまでとくに農業への関心を持っていないようでもなかったし、フォリーさんも継ぐことを求めたわけではなかった。しかし、そのことを話すフォリーさんはやはり嬉しそうだった。

新しく何かを創りだす者だけが歴史を受け継ぐことができるのであり、そしてその困難を知る彼こそが、受け継いだものの価値、歴史というものの重さに気付くのだ。

引退した経営者

フォリーさんの農園を出発してから、750エーカーのクルミ園主であるジャック・ギルバートさんを訪ねた。ギルバ



ギルバートさんの尊敬する義父である牛追いを見せてくれるジムさん。

め、バギーなどがなければ、それこそ西部劇の風景だ。ジムさんも引退する前はそれなりの経営者であったようだが、いまは奥さんと2人で数百頭の牝牛を飼っている。でもそれはアメリカでは趣味のレベル。むしろ系統の違う牛を交配することを楽しんでるかのようでもあった。

我々が訪ねたことを喜んで、バギーを引っ張り出し、牧羊犬での牛追いを実演して見せてくれた。引退した農家として悠々と暮らすジムさんへのギルバートさんの尊敬がわかり、またアメリカ人にとつての老後の1つの理想像というものも理解できた。

クルミの果樹園にそのままつながるギルバートさんの庭。我々のために開いてくれたホームパーティーで飲むビールの喉越しが爽やかだった。乾いたカリフォルニアの夏の夕空の下だからというだけではない。ジムさん夫妻を加え、カントリー&ウエスタンを歌う芸人一座にリクエストを繰り返しながら夜更けまでのパーティー。よく寝られたギルバートさんのお嬢さんの笑顔を含め、古き良きアメリカの家庭がそこにあり、なぜか僕までが懐かしさのようなものを感じていた。

アメリカにマインドを学ぼう

僕が回ってきたのはほとんど農村部であり、サクラメント、フレズノなどの

わば田舎町ばかりだった。しかし、そんな田舎町でさえ、各所でホームレスの人々を見かけることも多かった。金に余裕のあるホワイトカラーは郊外のタウンハウスに住むようになり、町中にはメキシコ人の住宅が空き家が目立つ。また、農業地帯であるがゆえに農業労働者としてのメキシコ人が、町の一角にトレーラーハウスを連ねたり、アメリカの町並みとしてはいかにも貧しそうにスラムを形成している場所に出くわすことも少なくなかった。

人種間の葛藤、ホームレスの群れ、離婚や家族の崩壊、訴訟社会、暴力と麻薬等々。我々が日頃メディアや人の口を通じて耳や目にするアメリカについての風聞は、必ずしも芳しいものではない。

誰もが当然のように「成功者」たることを目指し、「チャンス」が平等に与えられることこそが社会の基本理念としてあるアメリカ。であればこそ厳しい競争と契約の原理の中で、誰もがチャレンジャー（挑戦者）であり続けることが求められる。そして、我々が耳にする様々な社会病理とは、アメリカ社会のもう一つの側面なのである。しかし、アメリカという国はその競争とチャレンジャー精神によって発展と再生を繰り返しているのだ。

もともと、現実のアメリカ社会も様々な救済的な社会システムがあることはいうまでもなく、また常にリターンマッチのチャンスが与えられている。ほぼすべての成功した日系人農業経営者たちも、一度は敵性外国人としてすべてを奪われ、その後改めて成功者の階段を上って行った人々なのだ。

しかし、どの国であれ、自ら未来を創り、社会に対して一定の責任ある地位を占めようと考える「経営者」であり、誇りある「職業者」であろうとするのなら、アメリカ人があたりまえと考えるチャレンジャーとしての生き方は、競争の厳しさはそれぞれであっても、当然のことなのではないだろうか。

経営者の逞しさが守る日本農業へ

日本の農業がアメリカを始めとした海外の農業に滅ぼされるかのように思っている。しかし、僕には決してそうとは思えない。

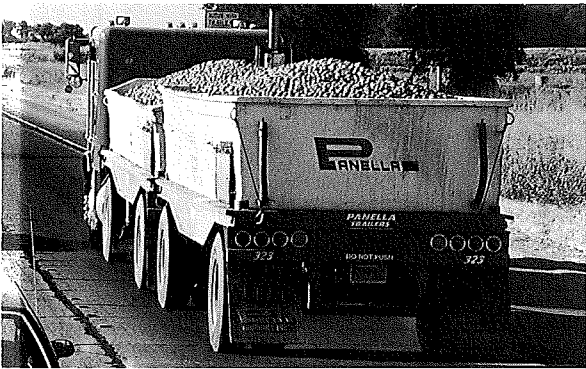
確かに多くの農業関係者が言うごとく、カリフォルニアでは、日本とは比較にならぬ経営規模で、恵まれた自然条件を活かした農業が行われている。日本の農協組織にも劣らぬ農業界による政治へのロビー活動も活発で、その効果も大いに発揮されているようだ。しかし、もし仮に「日本農業がカリフォルニア農業に負けて滅びる」のだとしたら、それは言われるような農業経営規模の大小や気象条件や政治的対応の有無などを理由としてではないのではないかと。

それは、アメリカの農業がいかに機械化レベルを上げて大規模化しても、農業の原理原則に忠実なまともさを持ち続けているのに対して、わが国の農業がお金と手間をかけたつもりでいながらも、実はひどく粗放で手抜き農業に成り下がってしまっていること。そしてさらに、彼の国の農業経営者たちが持つ勇気やプライドやチャレンジ精神に対して、わが国の農業界をリードする人々の敗北主義

ゆえに、ではないかと僕は思う。アメリカの農業の本当の強さとは、農業を担う一人ひとりの経営者の逞しさと、競争の中で鍛えられた、集団や組織や地域の中に埋もれぬ、個人としての強さと誇りの高さではないだろうか。

しかし、わが国農業界ではそのリーダーたちは、外国農業の脅威を語り、日本農業の脆弱さを語り続けることに終始してきた。現在の農業界を支配する組織や団体の既得権益を守るために。それらの情報は、常に農業界や村社会を支配し管理する都合に合わせた「内向きの情報」に加工されて解説され、人々に伝えられてきたのではないかと。まさに大本営発表のごとくに。そして不満は「ガス抜き」によって処理する方法までもがシステム化されてきた。

しかしそうしたことが続けられてきたのも、わが国の産業界の繁栄があつてのことであつた。しかし、頼るべき産業界も単なる景気の循環というレベルにとどまらぬ大きな変革を迫られているのだ。



アメリカの加工用トマトは味が優れるわけではなく、ただ固く機械にかけやすく、供給力が高いのだ。

村に生き続けようとするのであればこそ、村から離れてみる必要がある。日頃の住み慣れた場所から離れ、異質な人々との緊張感の中で、自分の目で、自分の体で、自らの位置を、現在の自分を問うてみる必要があるのではないかと。

豊かさの中で試される日本人

「日本農業を考えぬ商社の農産物輸入」などと農業界は批判する。しかし、それは国内農業の供給不安定への止むを得ぬ対策であると、農業界が恥じるべき性格のことではないのか。あるいはそこにチャンスがあるとは考えられないのか。また、「後継者がいない」などと嘆くのも、やめにしよう。もし子供が別を選ぶべき道を見付けたというのなら、それでよいのではないかと。受け継ぐべきは単なる農地や資産ではなく、家の、そして親の「誇り」なのだ。それが無い限り、農業を継いだとしても彼は財産を食い潰すだけだし、他の人生でもそれは受け継げるのだから。

仮に、農業になんらかの政策的援助は必要だとしても、経営者までもが少し弱弱になりすぎているのではないかと。せめて自らの困難を被害者顔で声高に語るのにはもうそろそろ終わりにしよう。

農業に限らず、我々日本人は空腹感のない経営環境や日々の暮らしの中で、いつの間にか未来への責任を見失い、自らを甘やかすことを覚えてしまっているのではないかと。そして、安楽椅子の居心地のよさに慣れ親しみ、そこから立ち上がることを厭う癖の付いた老人のようになりはじめているのかもしれない。

わが国の現在は、開発途上国でもなく、食糧難の時代でも窮乏の時代でもないのである。欠乏の中では、種の本能が人々を前進させるだろう。しかし、豊かさの中では自負をもち、夢を描き、未来への意思を持つ者の存在が無ければ、社会は停滞と混乱のなかに落ちていかざるを得ないのだ。現在を守るだけでは未来はない。すでに「現在」とは「過去」の結果にすぎないのだから。人間というものは、むしろ豊かさの中でこそ、その存在が試されるのではないだろうか。

初めてカリフォルニアの農業の一端に触れて、さらにその感を強くした。そして、いまこそ改革者としての若い農業経営者たちは自らを鍛え、アメリカ農業や彼の地の農業経営者たちの素朴で誇り高く真面目な開拓者精神に学び、日本の風土の中で我われ独自の、日本にしかない、それぞれの人にしかない農業と経営を展開させるべきなのではないかと。もとより日本ほど農業にとつての恵まれた市場環境をもつ国はないからだ。

この記事を書いている筆者自身、たった1週間、それも駆け足のお膳立てされた視察旅行だけでアメリカ農業を語るのには、いかにも乱暴な気がしている。しかも僕の感想には、初めての海外旅行者にありがちな旅先への過剰な思い入れが支配しているのかもしれない。しかし、ほんのわずかな人々との交流や駆け足で回る旅程の車窓の景色からですら、アメリカ農業の、そして経営者たちの逞しさを思い知らされた。同時に彼らの姿が、いま、自由に羽ばたこうとするわが国の「農業経営者」たちにダブって見えた。